

第59回九州地区大学一般教育研究協議会議事録

<https://doi.org/10.15017/21034>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 59, 2011-03-01. 九州地区大学一般教育研究会
バージョン：
権利関係：



初年次、「基礎学力」支援から「キャリア教育」に向けて

福岡工業大学 阿山 光利

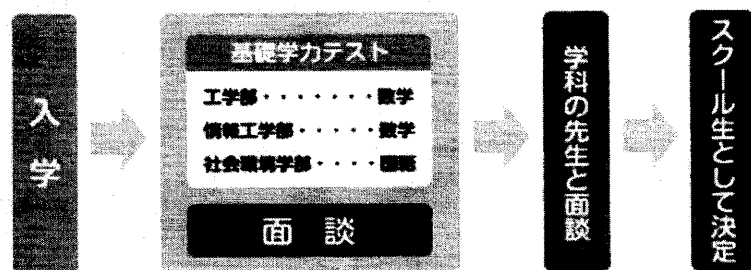
はじめに

本学の理念である「きめの細かい教育」の実現、退学・留年防止ならびに自律的な学習習慣の形成を目的として、FD推進機構にフレッシュマンスクール開設WGを設置し、その基本構想にそってフレッシュマンスクールが開設された。また社会環境学部での「キャリア教育」の取り組みも5年目を向かえたことから、「就業力」の養成など時代の要請を踏まえ、「入り口」から「出口」までの保障のあり方を今一度、確認するための機会としたい。

1. フレッシュマンスクール開設とスクールの特長

本学は、工学部、情報工学部ならびに社会環境学部（文系）の構成であるため、本学での勉学において基盤となる能力（とくに数学〔工・情報工〕、国語〔社会環境〕およびコミュニケーション（全学））への学習の支援体制として、平成21年4月、フレッシュマンスクールを開設した。学習形態・組織は、高校教員経験者ならびに教職課程の学生のもと、集合・個別学習とする。この体制は、有意義な学生生活を保障する「もう一つの」教育の「場」と考え、入学時の統一テストの結果にもとづき、基礎数学科目〔工・情報工〕および教養ゼミ〔社会環境〕担当教員との連携の下、スクール生を決定し、さらに出席状況を「学生カルテ」をとおして双方向で確認する。 FD推進室フレッシュマンスクールより

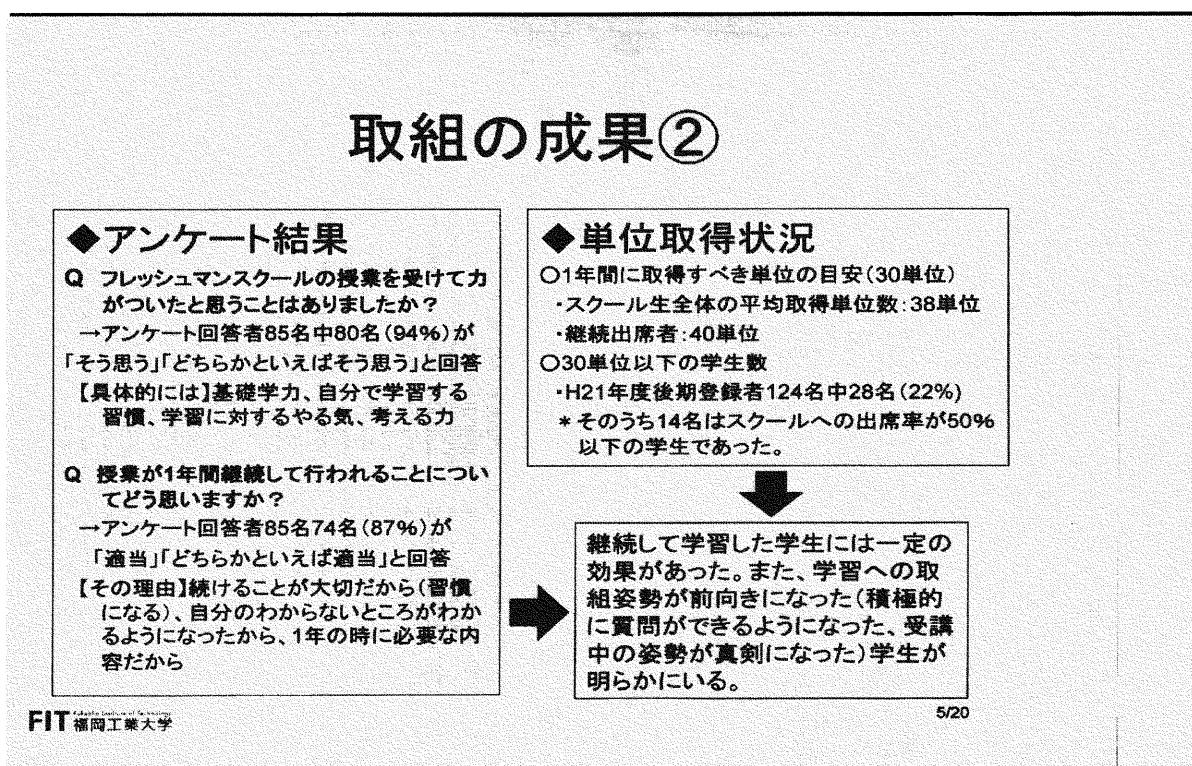
フレッシュマンスクールの対象者



OH21集合学習の対象となった学生人数: 118名(1年生全体の 9.9%)
OH22集合学習の対象となった学生人数: 172名(1年生全体の15.8%)

●集合学習の出席率 77.5%
(数学84%、国語61%)

通年での実施の結果、出席状況の良い学生については、統一テスト（4月・1月）結果の向上、平均取得単位数以上の単位取得が認められた。なお本スクールの目的である「自律的な学習習慣の形成」についてはスクール生の9割以上から高い自己評価を得ている。



2. キャリア教育に向けて

本学社会環境学部では、平成17年4月より、「キャリア形成Ⅰ」を1年後期に必修、「キャリア形成Ⅱ・Ⅲ」を2年前・後期に選択として開講し、キャリア教育に向けた試行錯誤と実際理解に努めてきた。

とくに1年次においては、関心分野や基礎学力に差があるため、「導入」の段階で、フレッシュマンスクールとの連携、さらに基礎知識と教養の質を高めることが実践的なキャリア教育の基礎となるという認識を深めたうえ、「自己の成長」と「集団・社会」「文化・風土・自然」への関心がより高められるよう、共に考える場としてその内容を構成してきた。

進路〔就職〕の設計と実践 社会環境学部教養ゼミ教材より

大学生活の4年間は、社会環境学部のカリキュラムに沿って、基礎科目、基幹科目、展開科目へと段階的に専門性を高めていきます。と同時に教養ゼミナールや専門ゼミナールをとおして自分自身の興味や関心を確認し、さらに知的関心が高めるなかで自分の将来像を描き、それらを実践的な力をとおして実現していく大切な時間です。そこで、本学部の特徴ある進路〔就職〕支援の内容の流れにそって紹介します。

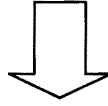
[1年] 自分の将来を思い浮かべることから始まる進路への扉

自分自身の興味や関心を確認し、知的好奇心を自ら刺激することで、教養の幅を広げ、将来に

についても思いを広げてみる時期で、「キャリア形成Ⅰ」をとおして自己価値を高めることの重要性に気づく。

前期

「教養ゼミ（必修）」や「人間形成（必修）」で、人としてのあり方や生き方を考え、自分や社会について理解を深める。



後期

「キャリア形成Ⅰ（必修）」では、

- 自分を理解し** : 自身の成り立ちや成長について考える。
「自己物語」「私に影響を与えた人」「心身の健康」
- 社会を知り** : 社会常識や教養を深める。
「マナーとは」「新聞の理解」「会社・企業の仕組み」
「日本や世界の社会・文化」「日本・世界の諺」
- 社会の中で自分に合った方向性を考える** : 社会での適切性を見る。
「将来の姿」「適性」「SPIとは」「日常の英語」
「人格の形成」「情報社会とパソコン」

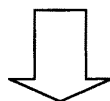
〔2年〕 自分に必要な知識を深め、扉に一步近づいてみる。

教養の幅を広げ、将来についても思いを広げてみるなかで、自分と社会を結ぶために必要な知識を探求し、自分自身の価値を高めていく時期で、「キャリア形成Ⅱ」「キャリア形成Ⅲ」をとおして、自身の効力感や有能感を体験していく。

前期

「キャリア形成Ⅱ（選択）」では、自身の教養や知識を高め、社会への視野をさらに広げることで、自分に必要な知識を探る。

- 基礎知識・教養を高める** : 「言語表現」「英語Ⅰ」「パソコンⅠ」
「日常のマナー」
- 社会への適切性を探る** : 「現代の社会」「国際社会の動向」
「会社・企業の経営、法律」
「業界研究Ⅰ」「SPIⅠ」
- 創造性を楽しむ** : 「商品開発」「広告作成」



後期

「キャリア形成Ⅲ（選択）」では、自分と社会とを結ぶために必要な知識を深め、自分自身の価値を高めていく効力感を体験する。

知識・教養を高める : 「対話力」「文章力」「英語Ⅱ」

社会への適切性を身につける : 「業界研究Ⅱ」「SPIーⅡ」
「社会人としてのマナー」
「パソコンⅡ」
「インターンシップについて」

創造性を高める : 「社説の作成」「私の生涯」
「効力感と私の存在」

おわりに

本学での勉学の基盤になる能力に関して、フレッシュマンスクールならびに関連する1年次必修科目との連携が必要であること、とくに単位取得に向けた自律的な学習習慣形成の場として共に機能することが肝要と考える。また、キャリア教育の方向性に大きく作用すると考えられる基礎的な能力の伸びと広がり、まず現行の教科目の中での担当教員の工夫による基礎知識、教養そして問題解決への段階的な取り組みと学生の学習をおとした関心の高まりおよび効力感の体験によるものとする。その上で、本学に相応しい「就業力」の実践的な理解にもとづいたキャリア教育内容の段階的な発展性を保障する枠組みが必要と考える。

双方向型の授業実践の試行

九州女子短期大学 川野 司

1 はじめに

大学が大衆化しユニバーサル段階に入った現在、大学は多様な学生を受け入れているなか、学生の出口を保証していく責任がある。学生に学力と資格および社会が期待する資質能力を習得させる必要がある。これは大学の入り口と教育内容・方法に関わることであり、初年次教育やラーニング・アウトカムの問題と言える。そのためには、大学の講義一辺倒の授業を見直し、学生主体の学びの授業にシフトすることが求められる。2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」の発表後、文部科学省の質保証システム部会で、大学教育の質保証に関しての方向性は出されているが、具体的実践は各大学に任されている状況である。

そこで、授業内容・方法の改善の取り組みとして、学生の学びを中心にした双方向型授業を計画した。こうした授業形態は初めてだが、意図的にこの授業形態を試行してみた。本稿では、双方向型授業の概要と1学年授業科目「教育学概論」で、双方向型授業実践とアンケート調査結果を報告したい。

2 双方向型授業について

平成21年度前期の授業が講義中心であった反省を踏まえ、21年度後期授業では、学生が参加する双方向型授業を目指すことにした。後期の第1回授業オリエンテーションでは、各授業のシラバスの説明のなかで、学生が参加する授業について、次のプリントを配布して授業を進めていく話をした。

双方向型の授業について

川野 司

1 目的

授業を受け身で受講するのではなく、参画意欲を持ち、自ら考え自ら学ぶ姿勢を醸成する。

2 学生が参加する授業が目指すもの

- ① 教壇からの「一方通行型」「知識伝達型」授業から脱し、学生と教員が共に「知を創造」する。
- ② 学生が日常的に学習する環境づくりに努める。授業は学期末の単位履修の試験勉強ではない。
- ③ 学生が自ら予習や復習を行い、自分で考える力と習慣を身に付ける。
- ④ 自らが授業に参画している実感を抱かせ、知の創造や学習の喜び及び充実感を味合わせる
- ⑤ 学生も教員も共に楽しい授業づくりを目指す。

3 授業の具体的な進め方

- ① 各グループ（2名）が、13のテーマの中から発表のテーマを1つ選択する。
- ② 発表のテーマは、シラバスのテーマ（教科書の頁）の中から選択する。なお、発表テーマが競合した場合は、ジャンケンで勝った方が好きなテーマを選択する。
- ③ 各テーマの発表グループには、13回の授業日を当てる。
- ④ 1回の授業時間で、グループが選択した1テーマについて発表し、その後、発表テーマについて集団討論をする。
- ⑤ 各発表グループ（木の1限目）は、発表レジュメ（資料があればそれも）を前日の水曜日までに川野に提出する。また発表当日までに全員分のレジュメ（資料があればそれも）を事務室でコピーし発表当日に配布する。なお発表レジュメは、次のアカイのいずれかを選択して自分でまとめ

- る。
- ア 教科書の頁内容をまとめる。
- イ 教科書の頁内容の疑問点や問題点を提起し、自分の考えや意見を述べる。
- ⑥ 発表時間は各グループ20分、その後の質疑応答及び討論は40分とする。
- ⑦ 発表における司会進行及び計時は、次回の発表グループが担当する。
毎回の発表当日には、全員が事前に教科書の発表内容の頁を読み、考察を中心にまとめた予習レポートを提出する（手書き不可・フォント12・字数は制限しないが、A4サイズ1枚）。予習レポートは授業開始前に回収する。当日の発表グループは予習レポートは提出しなくてよい。
- ⑧ 発表方法は各グループが自由に考える。レジュメ以外の資料があってもよい。また発表のために使用する機材（パワーポイント、OHP、スライド、模造紙等）は、事前に川野に連絡すれば、事務室と協議して準備したい。
- ⑨ 発表グループは、発表後の協議会（質疑応答や討論）の内容をまとめ、まとめたプリントを次回の授業で全員に配布する。
- ⑩ 参加者から発表に対する3項目評価（レジュメ、発表、質疑応答）と自己評価を行う。

4 単位認定の評価

- ① 学期末の論述式テスト（2題：解答用紙の字数はB4裏表程度）60%
- ② 出席、発表毎の予習レポート（12回分）、発表、質疑応答など 40%

【3項目評価表】

発表テーマ	
	よい 普通 よくない
レジュメの評価	3 2 1 (理由:)
発表の評価	3 2 1 (理由:)
質疑応答の評価	3 2 1 (理由:)
評価の合計点	() 点
発表に対する一言	
自己評価(満足度)	3 2 1 (理由:)

さらに、大学における授業は、学生の出口を視野に入れたアウトカムを保証することが大切である。既存の知識や技術を伝えることも大切だが、学生の卒業後の社会生活を視野に入れた教育が必要である。学生が創造的に物事を考え、仕事をしていくなかで課題や問題を解決できる論理的な思考力を習得させることが重要である。教育界のキーワード「生きる力」を中心にし、「全人的な力」と「課題探求の力」を身に付けさせることである。自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考えて判断し、主体的に行動できる力を学生に習得させたい。そのためには、教員自身が常に生きる力を追い求めることが大切であり、そのことを授業のなかで実践する姿勢を維持する必要がある。理論よりもまずは実践と実行とである。

3 学生が参加する授業実践

学生が参加する授業は、平成21年度後期授業から取り組んでいる。学生が参加する授業では学生が授業を受け身の姿勢ではなく、自ら参画意欲を持ち、授業の予習をしておくことを期待した。そのために事前に学習課題を準備し、その課題をレポートにまとめて提出させるとともに、担当者が課題発表を行い、発表に関わる問題を討議する学習形態を取った。前述の「授業のまとめシート」は、学生の復習に重きを置いたレポートであったが、21年度後期は予習に重きをおいたレポート様式にした。

たとえば教育学概論の授業では、人間科学部の人間発達学科と人間文化学科の約90名の学生がいた。授業の進め方の説明では、前述の学生が参加する授業が目指す5点を説明した。そして授業の具体的

な進め方は、4人の26グループをつくり、発表のためにグループで研究をするように取り決めて予習課題を与えた。予習内容は、①教科書の範囲内容をまとめる、②科書の範囲内容の疑問点や問題点について自分の考えを述べる、の2つのどちらかを選択して、下の様式で授業レポートを提出させた。

第2週テーマ「人間の形成と教育の本質」の予習レポート

提出日 () 月 () 日

() 科 () 年 氏名()

- 1 考察 (感想・意見・考えなど)
- 2 質問・疑問・要望など

予習レポートは、本来、授業における積極的な予習を勧め、学生が自ら主体的に学ぶ姿勢を習慣づけることを意図したものであった。予習をして授業に臨めば、自ずと授業で質問が出たり、話し合いや協議会が活発になると予想していた。しかしながら実際には、授業があまり活性化せず、質問もわずかしか出ないので、教員から質問をすることが多くなった。授業の様子も最初にイメージしたものと違って来た。協議会も思うように活性化できなくなり、司会者は参加学生を指名して、指名された学生は予習レポートを読むことがパターン化していった。そこで今までのレポート形式を改め、協議会を活性化するために5つの協議課題を事前に課することにした。その課題から1つ選択して予習レポートを提出することに変更した。次のものは、変更した予習レポート書き方とその内容の説明である。下線部は特に強調して説明した内容である。なお、課題1について、筆者自身による具体的なレポート記述例を提示した。

教育学概論 第5回テーマ「生涯学習」の予習レポートの課題

下から課題を1つ選択して予習レポートを提出する。予習レポートで「考察」と記載していたのを、「課題○」(○は課題番号)と書き、課題内容を転記してから、課題に対する自己の見解を述べる。課題は協議会の協議課題です。事前に自分の考えをまとめておけば、協議会に積極的に臨めます。予習レポートは、2部準備する。一部は授業前に提出し、他の一部は協議会で書き込みをしながら使用する。なお、予習レポートのコピペ(コピーして貼り付ける)はやめましょう。自分で教科書を読んで、自分の意見や考えを書くことが重要です。

課題1 あなたは、生涯教育や生涯学習という言葉を知って、どのようなことを思いますか。

また、あなた自身はそれにどのように対処していこうと考えますか

課題2 現在、「生涯学習」との言葉は社会的な認知ができています。しかし、いったん学校を卒業して就職した場合、自己の職務上の知識・能力や技能のスキルアップを図りたいと考えた時、再び大学等に入学して自己の専門性が高められる社会状況や制度システムになっているだろうか。また、そうした社会的な認知ができているだろうか。

課題3 初等中等教育(小中高校)や高等教育(大学・専修学校)で学んで習得した知識や技能は、すぐに古くなり、社会に出たときには、役立たないものなのだろうか。

課題4 現在の学校教育では、「知るための学習」と「するための学習」が中心になっています。

一方、「ともに生きるための学習」と「存在するための学習」も学校教育では大切です。今後、この二者を学校教育の中で進めていくためには、どのような取り組みをすればいいかについて、あなたはどのように考えますか。

課題5 「自己決定学習」が社会的に認知され、インフォーマル学習が行いやすい社会になるには、どのような制度的しくみやシステムが必要になってくるか、あなたの考えを述べなさい。

なお、上記の課題1を例として、次の具体的なレポートの書き方(起・承・転・結)を提示した。

一般に物事には、「守・破・離」と呼ばれる原理原則がある。「守・破・離」を一口で言えば、「最初は形から入っていき、そして最後には形から出て行く」という意味である。こうした考え方は、剣道、柔道、空手などの武道やスポーツの領域、あるいは歌舞伎や舞踊、さらには書道や華道、茶道など、日本の伝統芸能や文化の領域、いわゆる道を究めていく分野では、特に大切にされている考え方である。でも道を究めなくても、守・破・離は、私たちの日常生活でも大切な考え方を示唆していると思う。

「守」は基本形であり、それぞれの分野での形を忠実に守っていくということである。守は、基礎基本を繰り返し練習して、徹底してそれを身に付けていくという考え方だ。まずは、書き方や発表の仕方の基礎を練習することが大切である。

「破」は、繰り返して身に付けたその基本形から、少し出ていくことである。基礎基本を繰り返し練習をしていく中で、この部分を変えてみたらどうだろうかと、自分の思い付いた考えや方法を、基本練習の中に、少し取り入れていくという考え方である。

最後の「離」は、これまでに身に付けてきた基本形にとらわれず、自分の形を自由に創り上げていくことである。基本形がしっかりと出来ているからこそ、基本形から自然に離れることが出来るのである。あえて基本形を意識しないでも、自分流の形や表現が可能になってくるのである。そして最終的には、自分独自の世界を創り上げていくという段階であり、これが、形から出ていくという意味である。

起→ 最初の書き出しです。記述の導入と考えます。設問に関する一般論や社会状況から入るとよいでしょう。生涯教育や生涯学習の一般論や自分の考えを述べる。

私は、この言葉を聞いて最初に思うことは、人は生涯にわたって学び続けなくてはいけないということです。これまでの学校教育では、どちらかと言えば、教えられる立場でしたので、先生から言われることをただ勉強してきたと思います。試験があるからとか、成績にひびくからなどの理由で勉強をしていたようです。でも、学校で教えられる期間は、人の一生に比べると非常に短いことが分かります。そうしたことを考えると、私は勉強があまり好きではないのですが、生涯教育は長いこと学習していかななくてはいけないという気がしています。

承→ 起に書いた内容を受けてさらに続けて書いていく。

確かに生涯学習は一生にわたって行われることですが、生涯学習は、学校に行っている時とは大きな違いがあるように思います。学校では教えられる内容が決まっていますが、生涯教育では教えられる内容は特にないのではないのでしょうか。内容は自分で考えていかなければいけないように思います。どんなふうに勉強していくかについて、その学習の内容や計画や方法を、自分で決めなくてはけません。そこがこれまでと大きく違うところです。今は大学生なので、自ら学ぶ姿勢が求められますが、それでもまだ先生の存在が大きいと思います。学校を卒業して社会人になった時は、自分で考えて何もかも、自分の力でやっていかななくてはなりません。それまでの先生役をするのは自分自身になるのです。

転→ 起と承とで書いた内容とは違った内容で書く。少し視点を変えてみるということです。それまでの論述に変化をつけ、話を切り変えると考えてよい。

会社に勤めれば、会社の仕事を身に付けていくことが大切です。「郷に入れば郷に従う」の諺のようにやっていくつもりです。仕事をしていくことは、そのまま自分の勉強につながると思います。ですから仕事を一生懸命にしていけば、それが自分の能力と技能の向上になると思います。ことさら生涯学習と言わなくても、仕事を一生懸命に真面目にしていれば、それは生涯学習や生涯教育が実践されているのではないのでしょうか。生涯学習は仕事を終えた人が、自分の興味・関心・趣味を活かすめに必要なのではないのでしょうか。

結→ 最後に問いに対する自分の考えをまとめたり、問いに対する結論をのべる。起で、結論を述べても、再度、同じことを述べてもよい。

私は職業人あるいは一人の人間として、自分の能力や技能を常に高めていきたいと思っています。そのためには、学生である現在は、自ら学び自ら課題を解決していける力を大学で習得したいと考えています。また将来の仕事に就いた時、仕事に関わる問題を解決していける資質と能力を身に付けたいと思います。大学で学んだ知識は仕事ではあまり役立たないかも知れませんが、少なくとも、自分が遭遇する課題を解決していくための手法や方法の基礎づくりはやっていきたいと考えています。そうした力を習得することが、実際の仕事をしていく上では重要なのではないかと思います。ですから私は、生涯にわたって学び続けていく覚悟ですし、その基礎基本を大学では身に付けていきたいです。

4 司会グループの進行手引

学生が授業発表や協議会で主体的に取り組むために、司会進行の手引を作成した。

(1) 授業開始前の準備

- ① 司会Gと発表Gの机・椅子の準備（各Gにつき机1、椅子4）。
司会Gは黒板に向かって左側、発表Gは右側とする。
- ② 黒板に本日の授業テーマと司会Gおよび発表Gの氏名を書く。
- ③ 発表Gが準備した「発表資料」、「前回の協議内容まとめ」、川野の「授業レジュメ」の3種類が一番前の机に置かれているかを確認する。準備されてなければ、担当者に尋ねて準備する。
- ④ 司会G（手持ちマイク）と発表G（ワイヤレスマイク）のマイク準備をする（きちんと使えるかどうかを確認しておく）。

(2) 発表の進行の仕方

- ① 「みなさん、今から始めます。本日のテーマは板書してありますが、〇〇についての学習です。発表される内容をしっかり聞いて、後の協議会が活発になるよう、協力をお願いします。それでは発表Gは、自己紹介をお願いします。」
- ② 発表Gは各自が自己紹介をする。
- ③ 「発表時間は15分間です。発表が14分経過したら、ベルをならします。後1分で終わりになります。要領よくまとめてください。それでは発表をお願いします。」
- ④ 計時係は、発表が14分になれば、ベルを鳴らし、15分になれば発表者に発表を終わってもらうことを伝える。

(3) 協議会の進行の仕方（協議会は川野が準備した協議題で進める）

- ① 「ただ今発表してもらいましたが、先ず最初に質問を受けます。発表内容に関して質問がある人は挙手をお願いします。質問する人は、学科と名前をお願いします。」

- ② 挙手があれば、司会者は指名して質問を受ける。「はいどうぞ、お願いします。」
- ③ 「今の質問について、発表Gはどなたか説明をお願いします。」
- ④ 質問がいくつかあれば、②と③を繰り返す。質問の時間は5分程度に抑える。発表後の質問がなければ協議会に入る。
- ⑤ 「それでは、今から協議会に入ります。先ず最初に協議題1（協議番号は司会Gでどれを協議題にするか考える）について、協議を深めていきたいと思います。どなたか、口火を切っていただけないでしょうか。」
- ⑥ 「しーん」としていたら、司会者は発表を促す（知人や他の誰かを指名する）。協議会は活発になるよう工夫する。

(4) 司会Gと発表Gの留意事項

- ① 司会Gは事前に、誰が司会者として発表Gの進行及び協議会の進行をするか、役割分担をしておく。発表時の進行と協議会の進行は変わってもいいし、同じ人がそのまま続けて進行してもいい。
- ② 計時係は時間配分をみておき、警告のベルや発表時間オーバーを告げる。
- ③ 司会Gも質問や協議会の記録をとっておく。
- ④ 発表Gは、次回に協議会のまとめを作成するために分担して記録を取っておく。
- ⑤ 授業終了後は、机と椅子を最初の状態のように端に片付けておく。
- ⑥ あまったプリントは川野に渡す（欠席者は川野にプリントをもらう）。

(5) その他

- ① 配布資料は120枚印刷する。プリントは両面印刷する。用紙は養護教育科の事務室でもらえます（川野授業で使用を伝える）。印刷室は教務課の前の部屋です。印刷の仕方は分かる人に尋ねる。
- ② 予習レポートは授業開始前に集める。それで出席確認をする。予習レポートが準備出来てない人は、授業後川野に出席のチェックしてもらい、早めに予習レポートを提出する。
- ③ 後期テストは、協議題と教科書から記述式2題を考えて出題します。なおテストは教科書やプリントの持ち込みは不可です。設問に対して、あなたの考えを述べるのが大切です。
- ④ 予習レポートの提出は、教科書に書いてある内容で、あなたが興味・関心の持てる箇所について、あなたの考えを述べる練習をしてください。このことは、卒論や小論文を書くときに、あるいは採用時の筆記試験で役立つと思います。書く力をつけるためにも、少しずつ続けていってください。期待しています。

5 双方向型の授業評価

学生が参加する授業を行った結果、学生自身が授業をどのように思っているかを第14回の授業で調査した。調査項目は、学生が参加する授業の目的と目指す5点の結課を問う視点で作成した。アンケート内容は次のものである。

21年度後期授業についてのアンケート：科目名（ ）

授業の始めに、「双方向型の授業について」の説明をしました。授業について、率直な意見を
お願いします。□に番号を書いてください。

- Q1 あなたは、参画意欲が持てましたか。 ----- □
①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできていない
- Q2 あなたは、自ら考え、自ら学ぶ姿勢ができましたか。 ----- □
①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできていない
- Q3 あなたは、日常的に学習ができる環境づくりに努めましたか。 ----- □
①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできなかった
- Q4 あなたは予習や復習を行いましたか。 ----- □
①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできなかった
- Q5 あなたは、自分で考える力や習慣が身に付きましたか。 ----- □
①まあまあ付いた ②どちらとも言えない ③あまり付いていない
- Q6 あなたは、自らが授業に参画している実感をもてましたか。 ----- □
①まあまあもてた ②どちらとも言えない ③あまりもてなかった
- Q7 あなたは、この授業が楽しいと思いましたか。 ----- □
①まあまあ思う ②どちらとも言えない ③あまり思わない
- Q8 発表する時間の長さはどうでしたか。 ----- □
①十分である ②足りない ③長すぎる
- Q9 協議する時間の長さはどうでしたか。 ----- □
①十分である ②足りない ③長すぎる
- Q10 あなたは、協議に積極的に参加しましたか。 ----- □
①ある程度参加した ②どちらともいえない ③あまり参加しなかった
- Q11 レポートの内容はどうでしたか。 ----- □
①難しかった ②どちらとも言えない ③やさしかった
- Q12 レポートの記述はどのようにしましたか。 ----- □
①教科書など読んだり、他に自分で調べて自分の考えを書いた
②ネット検索などをして、コピーして貼り付けたが多かった
③だいたい自分の意見を書いたが多かった

Q13 協議会を活発にするためのあなたの考えを率直に書いてください。

Q14 こうした授業の進め方について、あなたの意見を聞かせてください。

Q15 双方向型の授業を改善していくために、参考になることを書いてください。

なお学生が参加する授業の評価について、73名の学生が回答した結果は次のものであった。

問1の「あなたは参画意欲がもてましたか」では、「まあまあ持てた」が35.5%、「どちらとも言えない」が49.3%、「あまり持てなかった」は15.1%であった。「参画意欲が持てなかった学生」と回答している学生が1～2割近くいることは、授業のやり方を工夫する必要がある。一方、専攻科2年13名の授業では、参画意欲が持てなかったとの回答が無かったことは、授業の人数にも関係していることが示唆される。

問2の「自ら考え自ら学ぶ姿勢ができましたか」では、「まあできた」が42.5%、「どちらとも言えない」が41.1%、「あまりできていない」が16.4%であった。

問3の「日常的に学習ができる環境に努めましたか」では、「どちらとも言えない」を含めると、学習への取り組む姿勢は持っていたことがうかがわれる。

問4の「予習や復習を行いましたか」では、「どちらとも言えない」を含めると予習や復習をしていたと思える学生が8割以上いたことになる。

問5の「自分で考える力や習慣が身に付きましたか」では、半数近くの学生が積極的な回答をしている。

問6の「授業に参画している実感がもてましたか」では、参画を実感している学生が2割程度しかないことは今後の課題である。

問7の「この授業が楽しいと思いますか」は、「まあまあ思う」が16.4%、「どちらとも言えない」が46.6%、「あまり思わない」が37%となっている。どちらとも言えないを消極的に解すれば、2割程度しか授業を楽しんでいることになす。楽しいと思う中味の検討は必要だが、授業を楽しくないと思う学生が多いことは授業のやり方の工夫が求められる。

問8の「発表の時間の長さはどうでしたか」では、8割近くが十分であると応えている。発表時間は、1グループにつき約15分与えたが、学生はその時間帯での発表がふさわしいと感じているようだ。

問9の「協議する時間の長さはどうでしたか」については、7割近くが十分であるとしているのに、2割以上が長すぎると応えている。実際には質問を含めて1グループ当たり20分を割り当てていたが、協議が活発でなかったことも影響していると思われる。

問10の「協議に積極的に参加しましたか」では、半数以上の学生が積極的でなかった。これは教員自身を感じていたことと一致した結果である。学生に積極的になれなかった理由を尋ねると、協議会で自分の意見を発表することに抵抗があるとのことであった。担当グループが発表した後で、グループ内で発表内容について話し合う時間を設けて欲しかったと言う。学生は予習をしているから、発表についてグループ内での話し合いの時間を取る必要はないと判断していた。しかし協議を活発にするには、そうした時間が必要であった。

問11の「レポートの内容はどうでしたか」では、「難しかった」と思っている学生が4割程度いた。

問12では、7割以上の学生が、教科書を読んでまとめたり、自分の意見を記載しているが、3割近くの者は安易なレポート作成をしていることが分かった。

6 おわりに

双方向型の授業は、発表者に積極的な学びの姿勢が感じられたが、参加者の受け身の姿勢がぬぐい去れなかった。まだまだ改善すべき問題はあるものの、体験的には学生の学びを育てる視点では、効果的な授業法の1つである。学生主体型の授業改善の取り組みを続けているので、今後とも学生の学びが深まる授業を実践していきたい。双方向型の授業は、その成果が授業内容・方法との関連が深いものである。そして授業改善は、学部・学科カリキュラムと学生のラーニング・アウトカムとの関係で論じられる問題である。このことは、教員個人による授業内容・方法を改善することだけで片付く問題ではない。学生の学びを育てる授業は、学士力の質保証の視点から学部・学科が一体となり、組織体システムとして、カリキュラムの在り方そのものを根本的から見直すべき大きな課題と言える。またこれは、大学の使命とは何かという現代的課題に直結する問題でもある。

初年次教育における「もやいすと」育成プログラムの展開

熊本県立大学 半藤 英明

熊本県立大学の人材養成

熊本県立大学では、本学のスローガンである「地域に生き、世界に伸びる」人材の養成に向け、学部の特長性を超え、地域貢献を見据えた地域体験型教育、現場に学び実践力を得るフィールドワーク、「熊本を学ぶ、地域に学ぶ」新熊本学など、熊本県全域をフィールドとした教育研究活動を行っている。

本学では、人材養成の目的を表す概念として「もやいすと」を用いている。「もやいすと」は本学が創設した造語であり、「熊本の自然や文化、社会に対する理解に立ち、専門の枠を超えて、自ら課題を認識・発見し、“地域づくりのキーパーソン”として地域の人々と協働して課題の解決に取り組む人材」と定義される。

「もやいすと」育成プログラムの階層

上記「もやいすと」の実現に向け、全学プログラムとして「もやいすと」育成プログラムを設置している。「もやいすと」育成プログラムは、次掲のような段階的プログラムとなっている。

● もやいすとジュニア

初年次教育の観点から、地域への理解を深めるとともに共生の精神、ボランティア精神に富むリーダー養成を目途に、全学共通科目「熊本の文化と自然と社会」の中で教育活動を行う。

● もやいすとシニア

学内外の諸活動を主体的に行う人材の育成を目途に、自主活動に関する情報提供を集約して行い、共同自主研究活動、インターンシップ、ボランティア、「もやいすとジュニア」教育活動支援などへの参加を促進する。学生は自発的にそれらの取組に参加し、企画立案や運営の仕方を学び、協働の精神を体得する。

● もやいすとスーパー

外部有識者を含む委員会が、学生・大学院生の教育研究活動の中から社会への貢献度の高いものを「もやいすとスーパー」として認定し、これを広く社会に紹介する報告会を実施する。

「もやいすとスーパー」の候補者は、年度末に各学部・各研究科の推薦をもって選出する。

もやいすとジュニア教育活動（平成 22 年度）

初年次教育としての「もやいすとジュニア教育活動」（平成 22 年度）は、次の通りである。

キックオフ・ミーティング 清掃ボランティア活動 集中講義 阿蘇合宿

それぞれの活動内容について、以下に簡単に紹介する。

○キックオフ・ミーティング

「もやいすと」育成プログラムの始動となるキックオフ・ミーティングを平成22年5月31日（月）、および、6月2日（水）の午後6時から中講義室3で開催(学生はどちらかの日に参加)。2日間通算で、新熊本学「熊本の文化と自然と社会」の科目履修登録者161名が出席した。「もやいすと」育成プログラムとしての本授業の位置づけを概説、「もやいすと」概念の説明、プログラムの目的・意義など、導入的講義を行った。

○清掃ボランティア活動

平成22年7月10日（土）、キャンパスがある熊本市月出校区の方々と協働して大学周辺の清掃活動を実施。150名の学生が参加した。午前8時30分、^{かみあぶらしょう}上油称公園に集合し、「清掃作業とともに地域の方々とも積極的にコミュニケーションを図って欲しい」と指示。のち、公園の近くを流れる健軍川に沿って一斉に清掃を行った。学生たちは川の中に入って清掃したり、粗大ごみを回収したり、また、地域の方の指導のもとにショベルを使って花壇を整備した。

平成22年7月17日（土）、同じく150名の学生が参加し、月出校区のほか健軍校区、尾ノ上校区、山ノ内校区の方々とともに上江津湖周辺の清掃活動を実施。「地域の方々との交流を深めるとともに、江津湖の自然環境・現況をよく観察してほしい」と指示。のち約1時間ほど、公園内のゴミ拾いや湖の中のゴミを取り除く活動を行った。

後日、学生たちは2回の清掃ボランティア活動を総括し、感想をまとめた「ボランティア活動シート」を提出。その内容は、いずれも学生たちの意識の変化が感じられるものとなっており、このようなボランティア活動の必要性を窺わせるものとなっている。

○集中講義、阿蘇合宿(座学、および、草原維持活動)

平成22年9月27日（月）から9月29日（火）にかけ、リーダーシップやボランティア精神の大切さ、および、広い視野で思考するための土台となる地域理解を深める目的で、複数の講師による集中講義を中講義室3で実施。科目履修登録者のうち、体調不良者を除く160名が出席。

29日午後から30日にかけては、阿蘇での体験合宿を実施。阿蘇青少年交流の家に宿泊。前日には「阿蘇の歴史と自然と町づくり」をテーマに専門家による講義、翌日には(財)阿蘇グリーンストックの指導により参加者全員が草原の維持保全活動(輪地切り)を体験。

後日、学生たちは本活動の趣旨、意義、意見をまとめたレポートを提出。初めての体験で視野が広がったとの意見が大勢。

成果の測定

もやいすとジュニア段階では、授業科目として成績評価を行い、また、授業評価アンケートにより学生の満足度をはかる。

もやいすとシニア段階では、毎年度定期的実施している教員面談の際に各学生の活動状況を調査して集計し、全学レベルで学生の諸活動への参加率を継続的にチェックする。

なお、今後の課題として、卒業生のいる企業・団体等に対して「社会人として求められる人材像」に関するアンケート調査を行い、本プログラムの改善につなげることを考えたい。

以下、協議会当日に使用したパワーポイントの資料を添付する。

初年次教育における 「もやいすと」育成プログラムの展開



熊本県立大学 半藤英明

■ 人材養成に向けて・・・

本学のスローガンである「地域に生き、世界に伸びる」人材の養成に向け、学部の専門性を超えて、地域貢献を見据えた地域体験型教育、現場に学び実践力を得るフィールドワーク、「熊本を学ぶ、地域に学ぶ」新熊本学など、熊本県全域をフィールドとした教育研究活動を行う。

■ 「もやいすと」とは・・・

本学では、人材養成の目的を表す概念として「もやいすと」を用いている。「もやいすと」とは「熊本の自然や文化、社会に対する理解に立ち、専門の枠を超えて、自ら課題を認識・発見し、“地域づくりのキーパーソン”として地域の人々と協働して課題の解決に取り組む人材」と定義している。

自らは自信にあふれ、人からは期待される人間へ

「もやいすと」育成プログラム



● もやいすとジュニア

初年次教育の観点から、地域への理解を深めるとともに共生の精神、ボランティア精神に富むリーダー養成を目途に、全学共通科目(「新熊本学」「キャリア形論」)として教育活動を行う。

● もやいすとシニア

学内外の諸活動を主体的に行う人材の育成を目途に、自主活動に関する情報提供を行い、共同自主研究活動、インターンシップ、ボランティア、「もやいすとジュニア」教育活動支援などへの参加を促進する。学生は自らそれらの取組に参加し、企画立案や運営の仕方を学び、協働の精神を体得する。

● もやいすとスーパー

外部有識者を含む委員会が学生・大学院生(個人またはグループ)の教育研究活動の中から社会への貢献度の高いものを「もやいすとスーパー」として認定し、これを広く社会に紹介する報告会を実施する。「もやいすとスーパー」の候補者は、年度末に各学部・各研究科の推薦をもって選出する。

■ もやいすとジュニアの育成(初年次教育)

もやいすとジュニア教育活動
(新熊本学・熊本の文化と自然と社会)

- ・リーダーシップ論
- ・ボランティア精神論
- ・地域理解
- ・体験活動(合宿ほか)

協力

- プレゼминаール
- キャリア形成論
- 新熊本学



もやいすとジュニア教育活動 (新熊本学:熊本の文化と自然と社会)

平成22年度

● キックオフ・ミーティング

● 清掃ボランティア活動

7月10日(土) 8:30～ 上油称公園・健軍川周辺の清掃
7月17日(土) 9:00～ 江津湖(上江津)周辺の清掃

● 集中講義

9月27日(月)	2限	リーダーとボランティア精神	高宗みさ子	前熊本県立第一高校長
	3限	熊本の社会	澤田 光	熊本県職員
	4限	熊本の産業	鳥飼雄恒	熊本信用金庫秋津支店長
	5限	テクニカル・レクチャー	津曲 隆	総合管理学部教授
9月28日(火)	2限	熊本の自然	井上昭夫	環境共生学部准教授
	3限	熊本の環境	篠原亮太	環境共生学部教授
	4限	熊本の歴史	浪原敬子	熊本日日新聞社文化部記者
9月29日(水)	2限	熊本の文化	米谷隆史	文学部准教授



● フィールドワーク 阿蘇合宿

9月29日(水) 午後～ 阿蘇の歴史・文化の講義、防火帯づくり、野焼きの実践(1泊2日)

清掃ボランティア活動 学生たちの反応

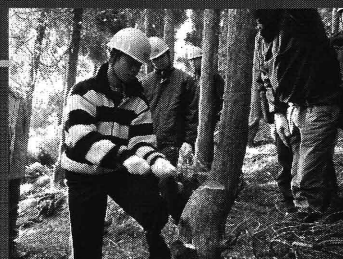
- 普段通っている川のところを掃除してみて思ったことは、意外にもゴミが多いということだった。全然気づかないような場所にもゴミが多かった。自分が捨てているわけではないがゴミが落ちていることに気づかなかった自分は意識が低いのだと痛感した。これからは、意識を高めてやっていきたい。
- 活動を通して「活動があったから参加したい」という気持ちから、「自分達でこのような活動の先頭に立ってやってみたい」という気持ちに変わったので、自分自身でも驚いています。
- 協力してボランティア活動をするのは、とても気持ちがよいことだと感じた。これからは、一人でもゴミを捨てる人になりたい。
- 人々との交流を通して得るものは物質的利益とは比べものにならないほど価値のあるものだった。
- 小学校から大人まで、みんなと協力して活動できたのはとても素晴らしく、環境美化への意識が更に高まる機会となりました。



■ もやいすとシニアの取組



中高大連携:作文教室



フィールドワーク

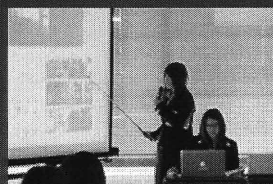


地域活動

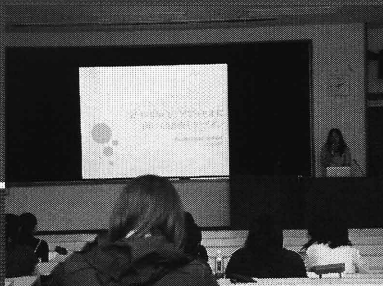


キャンパス・キャリア・エンジェル

■ もやいすとスーパーの認定



毎年度末、各学部及び各研究科からエントリーされた地域貢献度の高いめざましい教育研究活動を実践した個人や団体を「もやいすとスーパー」に認定するための報告会(外部有識者とともに認定)を実施する。



自主研究報告



学内施設案内システム

■ 「もやいすと」育成プログラムの全体像

段階的指標	教育プログラム	学年	教員の役割	段階の測定	点検・評価
到達目標 もやいすの実現 地域や業団でのリーダー的関わり	社会人としてのキャリアの獲得 企業 団体 教育機関	修了後 卒業後	「学び直し・学び直し」の支援	(就職率)	企業等へのアンケート
もやいすとスーパー 地域貢献度の高い教育・研究活動	地域と協働して行う活動 教育 研究	大学院 4年	教育研究の指導	「もやいすとスーパー」の認定	発表会での参加者アンケート
もやいすとシニア 学内外の諸活動に主体的に参画	学内外の諸活動 フィールド 共同自主研究 シンポジウム インタビュー キャリアアセスメント 学生クラブ 社会活動 サークル 高大連携	2~4年	指導、助言	面談をとおした活動状況の把握	諸活動への参加率
もやいすとジュニア 「地域」、「リーダー」、「共生の精神」の理解	初年次教育（学士課程）全学共通科目 ・新熊本学「熊本の文化と自然と社会」、「ことば、表現、歴史」、 「熊本の生活と環境」、「地域社会と企業」、「地域社会と行政」、「地域社会と市民ネットワーク」 ・「キャリア形成論」	1年	講義	授業科目の成績評価	授業評価アンケート

自信を身につけて社会へ！



環境アセスメント実習